

## 9 木村素衛委員会

### 一 活動・調査研究のテーマ

木村素衛先生の日記等遺稿文献及び西田幾多郎先生の木村先生宛書簡の整理・研究を通して、安曇野市教育の拠り所である木村先生の徳を追慕し、その生き方を学ぶ。

「テーマを達成するために、会館に保管されている資料、特に木村素衛先生の日記を、日記の持つ雰囲気を崩さないように旧漢字や表記の仕方をできるだけ生かしながら、読みやすい活字に書き改め、整理し、広く会員に知らせ、教育実践に生かしていく。」

### 二 活動・調査研究の成果

- ・ 本年度は素衛日記No.32, 33の判読を行なった。日記は44冊あるので、全部読みきるまでにはこのペースでいくとあと5、6年という見通しである。
- ・ 委員8名がペアを組んで日記の読み合わせを行なった。過去に素衛委員会を経験してきている委員と初めて委員会に入った委員とをペアにし、個人で読んできたものをペアで読み返し、判読できなかった箇所を検討した。委員一人当たりの分担は4分の1冊である。最初は判読できなかった箇所が多かった委員も、教えあい、学びあいながら進めることで読める箇所が多くなってきた。
- ・ 委員会での判読時間のほか、各委員が事前に自分の分担箇所を読んでくる時間を考えると、委員にとってはかなりの負担であるが、素衛先生の考え方や生き方に日記を通して触れることができ、有意義である。
- ・ 6月16日に行なわれた「安曇野の先人等に学ぶ会」で、昨年度判読した日記の一部の読み合わせを行なった。素衛先生の人柄、考え方を参加者の皆さんと共有することができた。
- ・ 本年度判読したNo.32, 33の日記は、指導者に見ていただき、書き換えや判読できなかった部分についてのご指導を得た。また、判読した日記は、データとともに、教育会館に保管してある。
- ・ 昨年度末、No.30, 31の判読を行なう中で、以下のような新たな発見があった。このことについては、「安曇野の先人等に学ぶ会」でも報告した。

素衛先生の日記を抜粋した『花と死と運命』の年譜には「大正12年12月に長野県下伊那郡千代村にて講演（長野県における最初の講演）」という記述があり、これまでの学習会や素衛先生に関する論文の中でもこの記述に基づいてきた。ところが、判読を行なう中で、大正12年12月には素衛先生は長野県での講演を行っておらず、京都にいたことがわかった。千代小学校等に問い合わせたところ、千代小にも文献としては残っておらず、講演会で「大正14年12月3日に講演した」と話されている（信濃教育717号）ことから、大正14年が正しいであろうと考えられる。これを受けて素衛先生の年譜が訂正されたということである。なお、素衛先生は、大正13年1月に結婚している。

### 三 活動・調査研究で深まったこと

- 日記No.32は大正13年4月22日から始まっている。この年、素衛先生は京都高等工芸学校の講師を退職、当時、大谷大学で教壇に立たれている。大正13年1月に素衛先生は結婚しており、日記の中にもエピソードが多く書かれている。

- 葵祭はきっと降らないと云われているが今日は雨だ。尤も午後は上るには上った。朝めしを食って縁側の籐椅子によって雨と山と木とを見ている。薄紫の紙にきちんと折りつつんだものをくれて行った。開いて見たら昨夜机の上で散った白バラの花びら二つ。一つには私の、一つには彼女の名前が記されてあった。(大正13年5月15日)
- 心持に溝渠が生れて激しく苦悩した。夕方帰り来ってミレーの画を見ている中にそこから受けたささやきが私の心を小さるものを超えて大なる愛へ導いた。その結果は大変よかった。(大正13年5月28日)
- 妻が私の心に敏感な事は驚くべきだ。それはミラクラウスだ。私の心の一寸の動きが直ちに彼女に解り彼女はそれによって動く。私は廣々とした自個の良心のよく落ちついた心で帰って何をしたか。草を摘み、エメラルド色の血を持った虫を幾匹かつぶし ダリア、白バラ、デイジー、トマト、コスモス等にそれぞれ心配をしてやってそれから新聞を読んだり風呂に入ったりした。特に彼女に話すところもない。夜、彼女は私の心に感謝した。直ぐ直覚する人だ。私も深く大なる心を持ち続けよう。それが私に一番幸福な事だ。静に感じ静に見、静に理解し、静に実現する。私も実際妻の感情の波動が悉く分る。私の気に喰わない時もある。失望的になる時もある。併しよく考えると彼女は哀れまるべきもの、いとしまるべきものだ。その心は小さい乍ら誠実に満ちている。正直に満ちている。桜■のような月見草の様な心でもある。(大正13年6月10日)

- また、社会的にも経済的にも安定してきている中で、真摯に哲学の道を進もうとする素衛先生の心の揺れも日記の中には表れている。

- 私はあらゆる関心から離れて常に唯一人なるものとして、唯一の目として自然に唯一の耳として声に接し得るようにならなくてはならない。憧れが真の生命である。現実は一全てエントイシュング！それが生きるものの運命であろう。苦い経験の後にのみ真を悟らねばならないことは悲しい運命だ。  
神よ！許されるなら私に一人のよき友を与えられん事を！私は孤独だ。私は真によき友を得るために孤独の自由を常に有しなくてはならない。  
そして実在につき進んで行く充分の勇氣と大膽と、自信とを有しなくてはならない。精神に取って最もいまわしきものは恐れだ。幼児の如き大膽なる凝視の瞳が必要だ。  
よし！私は新しき世界を創造しよう。(大正13年5月16日)
- 私は霊の孤独者だろうか。この頃の日記は如何に無味だろう。私は書き度い全てを書くべきだろうか。—。霊のこのアイザムカントはどうだろう。私は全てを学問に熱中する事によって忘れ度い。しかし霊のアインザムカイトは根本から癒す事は不可能だろう。それは何よりも深い願いなのだから。(大正13年6月27日)